



ウクライナ北部のチェルニヒウに5歳と1歳8カ月の娘たちと住むアリーナ（27歳）。このすぐ隣にある自宅も爆撃の被害を受けました。

国連の食料支援機関

国連WFPニュース

Feb. 2023 Vol.70

開戦1年、ウクライナの親子は今
— 冬の寒さに「食料か暖房か」選択迫られる母親 —
「私たちを忘れないで」
— 紛争長引くイエメン・シリア、
タリバンが政権を掌握したアフガニスタン —

3月1日は「アフリカ学校給食の日」、 3月9日は「国際学校給食の日」！

— 給食廃棄をデジタル技術で防ぐ ケニアの取り組み —

ケニアのジャリブ小学校では、国連WFPの提供するデジタル技術を使って、給食の食材廃棄を防ぐ取り組みが行われています。

国連WFPは政府と連携し、食材が出荷されて食卓に上るまでの、サプライチェーンの全記録をデジタル化しました。教師たちはスマホを通じて生徒の出席数などのデータを入力し、食料の在庫の動きや学校への割り当て量を調べることができます。これによって、生徒数に適した量の食材を調達できるようになり、廃棄の量を抑えられるのです。

ケニアでは、この数十年で最悪の干ばつが発生し、440万人が深刻な食料不安に陥っています。食材を無駄なく使い、同時に温かくてボリュームたっぷりの給食を子どもたちに提供することは、国にとっても学校にとっても大切です。

この学校で学ぶ14歳のグリフィンズも、警備員の父親の収入が少なく、1日に取れる食事が給食だけ、という日がしばしばあります。「給食は賢く強くなり、人生の目標を達成するためのエネルギーです」と話しました。



(写真)
ジャリブ小学校の生徒たちに米と豆の給食を作る調理員のハリマさん。



全文の詳しい記事はこちらへ



身近にできる国連WFP支援 レッドカップキャンペーン

国連WFPが給食を入れる容器として使っている「赤いカップ」を目印に、毎日のお買物で学校給食が支援できる**レッドカップキャンペーン**。

新たに3社が参加しました。売り上げの一部は学校給食支援に寄付されます。
<https://www.jawfp.org/redcup/>



株式会社上野忠
桜の花・よもぎ・ミックス粉



イトキン株式会社
ミッシェルクラノム
(限定レッドカップ
アイコン刺繍入り)



株式会社
MDホールディングス
ナッツスナッキングシリーズ
(全33品対象)

なぜ赤いカップなの？

2007年頃、当時の事務局長ジョゼット・シーラン氏はウガンダのリリーちゃんから壊れてしまった給食用の赤いカップを譲り受け、子どもたちに希望をもたらす学校給食の象徴として持ち歩くようになったといいます。

それ以来、国連WFPの学校給食支援と企業、そして消費者をつなぐ象徴として、この赤いカップをモチーフに活用しています。



国連WFP

<https://ja.wfp.org>
0120-496-819

受付時間 9:00～18:00
(通話料無料・年始を除く年中無休)

国連WFPは「飢餓をゼロに」の実現を通して、SDGsのさまざまな目標の達成に貢献しています。



貢献するSDGsの一例

ご寄付はこちら

WFP.JP



wfp_japanoffice

WFP_JP



WFPJapanOffice



メルマガ登録



App Store
からダウンロード

Google Play
でダウンロード

開戦1年、ウクライナの親子は今

―冬の寒さに「食料が暖房か」選択迫られる母親―

ウクライナとロシアの開戦から、2月で1年が過ぎました。国内外への避難を強いられるなど、苦しい生活を続けるウクライナの人びとは、容赦のない冬の寒さにもさらされています。燃料価格の高騰もあり、子どもを抱えた母親たちは「食べ物か暖房か」の二者択一を迫られようとしています。



ウクライナ南部のオデーサに住むイリーナ（前列中央）と、孫のアーニャ（6歳）、デニス（3歳）。左は娘のウリヤーナ（18歳）。後方右は養女のサーシャ（20歳）とその息子のデビッド。後方中央はパートナー団体の代表、左は国連WFPオデーサ事務所の職員です。

母親たちの苦しみ

「実際に爆撃が始まるまで、本当に起きるとは信じられませんでした」

北部のチエルニヒウに住む27歳のアリナ（表紙写真）は開戦翌日の午前4時、夫から「今日は娘たちを幼稚園に連れて行っちゃいけない。爆撃が始まるんだ」と告げられました。実際に間もなく爆撃が始まり、夫婦は5歳と1歳8カ月の娘を連れて、地下に逃れました。自宅の窓や壁が破壊され、親戚に借金して何とか修理しました。「窓ガラスがないと、冬には子どもたちは凍えてしまいます」と、アリナは訴えます。

一家は国連WFPから現金支援を受け、果物や肉、卵、ヨーグルトなど必要な食材を購入しています。アリナは「子どもたちには、成長するための食事寒さをしのぐ服も必要。親のものはなるべく買わず、子どもたちに回しています」と話しました。

オデーサに住むイリーナ（上の写真）は2人の養子を含む10人の母であり、孫も9人います。長い間、大黒柱としてアルバイトなどで家族を養ってきました。

しかし戦争により、一家が生きるための選択肢は、国連WFPの食料支援を受ける以外にありませんでした。

イリーナは、冬の間食べ物確保できず、かどうかに不安を覚えています。「私の食事を減らして備蓄に回そうとしましたが、体力が落ちて朝起きられず、子どもたちの世話ができなくなりました。今は支援食料の缶詰を食べずに保存しています。この冬は何が起こるか分からず、食べ物がない可能性もあるのですから」

インフラ被害で凍えるリスクも

ウクライナでは1800万人が人道支援を必要としており、650万人が国内での避難生活を強いられています（2022年12月時点）。避難などによって多くの人が職を失い、3世帯に1世帯が日々の食事を十分に摂ることができずにいます。

一部地域は激しい爆撃や戦闘によって、発電所や水道、ガスなどのインフラ設備に深刻な被害を受けました。さらに、暖房に使う燃料価格も上昇しています。今この時も、アリナやイリーナのような母親たちは、限られたお金を

食料に使うか、暖房に使うかの選択を迫られています。

国内の食料価格も、1年間で22%上昇しました。さらに東部・南部では、戦闘のためサプライチェーンが混乱し、必要な食料が住民に届きづらくなっています。国連WFPが東部で調査したところ、回答者の4割が食料の量を減らしたり、大人の食事を子どもに回したりしています。

人びとに温かい食べ物と栄養を

国連WFPは、ウクライナで毎月約280万人に食料の配布、または現金支給を通じた支援を実施しています。現金を通じた支援には、人びとが自ら購入した食材を調理し、温かい料理を食べられるメリットがあり、昨年3月以降の支援総額は4億米ドルに上ります（2022年12月時点）。

現金支援に当たっては、ブロックチェーン技術を活用して18の人道支援団体と連携し、重複を避けて可能な限り多くの人びとに、まんべんなく支援を届ける仕組みも設けています。

ウクライナでは避難先から地元へ戻る人びとも増えていますが、帰還者の多くは自宅を破壊されるなど、生活再建の難しさに直面しています。

国連WFPの支援は、避難民や戦闘地域に暮らす人、帰還者を含めたすべての人びとが、栄養価の高い温かい食事を摂り、健康な体を保つために行われているのです。

「私たちを忘れないで」 ―紛争長引くイエメン・シリア、タリバンが政権を掌握したアフガニスタン―

何年もの間、内戦が続くイエメンやシリア、タリバンが政権を掌握したアフガニスタンなどの人びとも、引き続き深刻な食料不安に陥っています。ウクライナに注目が集まる一方で、人びとの関心が薄れてしまいがちな、これらの地域にも目を向けてみましょう。

イエメン―支援が命綱

イエメンは2015年の内戦開始以来、前例のないほどの深刻な飢餓に陥っています。長引く内戦にウクライナからの食料輸入の減少と物価高が重なり、1900万人もの人びとが十分な食料を得られない状態です。栄養不良の乳幼児の割合も世界で最も高くなっています。国連WFPは昨年、輸送船をチャーターしてウクライナからイエメンなどへ穀物を輸送しました。さらに年間1300万人に支援を届けることを目指していますが、資金難の壁に直面しています。

南西部のタイズに住む36歳のサミール（上の写真）は、内戦の被害を受けて仕事を失い、食料支援で6人の子を養っています。生まれてまだ11カ月のアメールは、栄養不良のため栄養強化食品の支給を受け取っています。内戦のため国土の荒廃したイエメンは、食料をほぼすべて輸入に頼っており、人びとにとって国連WFPの支援がまさに「命綱」になっています。

シリア―物価高騰が自立を阻む

2011年から10年以上内戦が続くシリアでは、国民の半数に当たる1200万人が深刻な食料不安に陥っています。国連WFPは毎月約550万人に支援を続けていますが、食料価格の値上がりで、自力で生計を立てていた人びとも新たに支援が必要な状況です。

アレッポに住むグフランは、2011年に爆撃で夫を失い、妊娠中に2人の子を抱えて市外へ避難しました。2016年に帰還してからは、家事手伝いや家庭教師をして子どもたちを養ってききましたが、ここ1、2年の物価高で家計が立ち行かなくなりました。彼女は戦闘で親を失った甥2人の面倒も見ていますが、子どもや甥に牛乳をかうお金がなく、「栄養価が低いことは分かっていますが、牛乳の代わりにお茶を飲ませています」と話しました。

アフガニスタン

―女性と子どもが苦境に

タリバンが政権を掌握してから約1年半が経過するアフガニスタンも、ウクライナ同様厳しい冬に直面

夫に捨てられ、6人の子どもを抱えるラビアは「家計は危機的状況」と話します。幼い末っ子はここ1カ月で急速に弱ってしまいました。上の息子2人は日雇いの労働をしています。家族を養うほどの収入は得られていません。

国連WFPは2021年以来、栄養不良に陥った乳幼児100万人以上に栄養強化食品を提供しました。また女性たちに、農業やパン作りなどのスキルを身につけてもらうことで、経済力を高める取り組みも続けています。ウクライナ以外の国でも何百万もの親たちが、子どもに十分な食事をさせてあげられないことに苦しんでいます。国連WFPがこうした親子の命と未来を救うためにも、皆さまの力が必要なのです。